広島大学考古学研究室50周年記念事業をおえて

野 島　　永・葉 杖 哲 也

１．はじめに

広島大学大学院文学研究科考古学研究室（地表圏システム学講座考古学分野）は、平成27（2015）年４月で開設50周年を迎えた。昭和40（1965）年４月の開設当初、松崎寿和・潮見浩・藤田等・川越哲志・河瀬正利先生らを中心に、帝釈峡遺跡群の石器文化、東アジアの鉄・鉄器文化、イランの先史文化などといった特色ある調査研究と、それを機軸とした教育活動を推進してきた。

このため、広島大学考古学研究室の開設50周年を記念して、１．考古学研究室50周年記念講演と祝賀同窓会、２．記念論文集・文集の刊行、３．考古学研究室所蔵遺物コレクションの公開展示を計画した。祝賀同窓会については平成27年11月28日（土）に無事執り行うことができたものの、教職員の異動・減員など諸般の事情により、記念論文集・文集については大幅に遅れ、平成28年12月の刊行となった。御執筆いただいた先生方、修了・卒業生の皆様方にはご迷惑・ご心配をおかけしたこと、ご寛恕いただきたい。また、当初広島市内のギャラリーにおいて収蔵遺物の展示を行う予定であったが(1)、その計画も変更せざるをえなくなった。このため、考古学研究室の卒業生で広島県立歴史民俗資料館学芸員の葉杖が歴史民俗資料館での展示公開を計画することとなり、平成29年度春季特別展として広島大学考古学研究室の収蔵遺物コレクションの展示が実現した(2)。

２．50周年記念講演と祝賀同窓会

平成27年11月28日（土）、KKR ホテル広島（国家公務員共済組合連合会広島共済会館）２階 安芸の間において午後２時30分から午後３時50分（予定）、古瀬清秀氏が「広島大学考古学研究室50年のあゆみ」と題した記念講演を行った。その後、引き続き同ホテル１階 孔雀の間において午後４時30分から午後６時30分に祝賀同窓会を開催した。総合司会は野島が行い、企画運営と記念品発注については葉杖が担当した。その他、祝賀同窓会の進行を鈴木康之氏、出席者管理と会計を沖憲明氏、写真撮影を菊井博史氏、２次会運営を小林奈緒美氏にそれぞれ担当していただいた。受付には考古学研究室事務補佐員中村典江氏のほか、小林奈緒美氏、石丸恵利子氏、大近美穂氏らに手伝っていただいた。このことについても記して感謝したいと思う。

（１）50周年記念講演

古瀬清秀氏による記念講演は平成27年11月28日（土）午後２時30分から行われた。プロジェクターを使い、多くの教員・学生の画像を掲示しつつ、懐かしい研究室の行事や出来事についてお話しいただいた。修了・卒業生だけでなく、一般にも公開したため、150名を超える聴講をいただいた。帝釈峡遺跡群の石器文化・東アジアの鉄・鉄器文化・イランの先史文化

に関わる調査研究を中心としつつも、考古学研究室開設時期から広島大学のキャンパス移転、国立大学法人化といった組織・教育改革に対処していかざるをえない状況について、その時々の思い出話とともに語られた[3]。当初の講演予定時間を大幅に超過した２時間に及ぶ講演であった。

（２）祝賀同窓会（50周年記念同窓会）

当初、午後４時からの開催予定であったが、古瀬氏の講演が長引いたため、やや遅れて午後４時30分からの開催となった。全国から修了・卒業生、研究員ら131名にご参加いただいた。横田禎昭氏の乾杯発声のあと、来賓の春成秀爾氏からは、開設当初の広島大学考古学研究室の様子についてエピソード[4]のお話しがあり、開設50周年の祝辞をいただいた。宴もたけなわのころには、修了・卒業生の安田龍太郎、古瀬裕子、西田茂、山本直人、戸高真知子、安間拓巳、岡田容子、中尾篤志、永田千織、今福拓哉、伊川桃子の各氏がそれぞれの思い出を語られた。その後、考古学研究室に特任准教授として着任することとなったシュタインハウス ウェルナー氏が挨拶し、考古学研究室第１期生川越俊一氏の祝電が披露された。最後に中締めの乾杯で山中章氏が締めくくった。出席者が一同に集まり、卒業生の写真家菊井氏による記念撮影で閉会となった。帰り際、広島県伝統的工芸品の銅蟲のペン皿を記念品としてお持ち帰りいただいたが、その後広島市内繁華街にて２次会から３次会へとなだれ込むこととなった。

第１図　50周年記念祝賀同窓会（平成27年11月28日、KKR ホテル広島にて）

３．50周年記念論文集・文集の刊行

当初、Ｂ５判横組で、考古学および関連分野の論文を収録する論文集、考古学研究室での想い出などを記した文集の２部構成とし、考古学研究室の教職員、および修了・卒業生、大学院文学研究科・広島大学文学部で非常勤講師（客員教授）として講義をしていただいた先生方にむけて執筆者の募集を開始した。論文の締め切りは平成26年10月末日、文集の締め切りは平成27年４月末日とし、前述した平成27年11月28日の祝賀同窓会に間に合わせる手筈であったが、諸般の事情により、編集作業が滞ることとなった。刊行時期を大幅に遅らせたが、野島が編集を担当することとなり、論文37編、文集15編を取り纏めて平成28年12月に刊行することができた。

４．50周年記念特別展示の開催

広島県立歴史民俗資料館では、平成29年度春の展示会として、「ひろしま遺跡再発見！ー広島大学考古学研究室の歩みとともにー」を平成29（2017）年４月21日（金）から６月11日（日）まで開催した。展示構成の検討にあたり、広島大学の考古学の研究成果が初めて一堂に会すると言ってもよい展示会であることを鑑みて、オーソドックスな展示構成とした。具体的には、松崎壽和先生の広島高等師範学校への赴任に始まり、松崎・潮見浩先生らによる考古学研究室の開設から現在に至る広島大学の考古学の調査研究の歩みと広島県の考古学との関わりを主軸とし、加えて「帝釈峡遺跡群の調査研究」と「たたらを中心とした日本の製鉄遺跡の調査研究」を大学の特色ある研究としてコーナーを設け、これに「広島県北の古墳」を加えた３つのテーマをトピックスとして展示した。

第２図　広島県立歴史民俗資料館における50周年記念特別展示
（平成29年４月21日～６月11日）

メイン部分の展示は「広島大学考古学研究室と広島県の考古学」と題し、昭和23（1948）年に調査された比治山貝塚から平成７（1995）年に調査された辰の口古墳まで調査年順に配置して、それぞれの遺跡の調査研究の意義と成果を通して広島大学の考古学研究が広島県の考古学に果たした役割を紹介した。メイン展示はさらに、

第１期　基礎資料収集と応急調査 －「モノ」と「コト」の考古学が広島へ－〔昭和23～36（1948～1961）年頃〕

第２期　考古学研究室と発掘調査 －調査研究と大規模開発－〔昭和37～46（1962～1971）年頃〕

第３期　大学から行政へ －開発にともなう発掘調査体制の整備と拡大－〔昭和47～52（1972～1977）年頃〕

第４期　再び学術調査へ －瀬戸内海から中国山地まで－〔昭和53（1978）年頃～〕

に細分し、それぞれの遺跡が時代的にどのような位置づけの中で調査研究が行われたか、うかがうことができるよう試みた。なお、この４期区分は、河瀬正利先生が「広島県埋蔵文化財保護行政四十年」（河瀬 1992）において、広島県の埋蔵文化財保護行政の歩みとして示された４つの段階に拠らせていただいた。

トピックスとして展示した各コーナーのうち、帝釈峡遺跡群の調査研究では、「帝釈峡遺跡群－日本でも例のない規模と歴史のある調査－」と題し、これまでに調査された各遺跡の説明および主要遺跡の出土品の展示を通して、調査研究の歩み、遺跡群の特色と調査の目的を示し、各遺跡を連携させて広域的にとらえ、長期間にわたる国内では例のない西日本を代表する縄文時代の調査研究であることを紹介した。たたらを中心とした日本の製鉄遺跡の調査研究では、「鉄作りの歴史とたたら－日本の独自の鉄作りの成り立ちを明らかに－」と題し、鉄作りの始まりと、良質の砂鉄が豊富に採れるという地域的特性を背景に古代から中世へと発展し続け、近世の「たたら製鉄」へと結びついていく様相を考古学的に明らかにしてきた、全国的にもパイオニアと言える調査研究の成果を紹介した。展示した資料は計547点[(5)]にのぼった。

展示会では、のべ46日の開催期間中、4,905人の方々に御来館いただいた。とりわけ、ちょうどこの時期に社会科で原始・古代を学習する小学６年生の来館が多く、通常では見ることのできない広島県最古の土器（帝釈馬渡岩陰遺跡出土深鉢形土器）や三角縁神獣鏡（中小田第１号古墳出土遺物）の前では、熱心に見入る小学生の姿も見受けられた。また、これまでに何度も訪れ、考古系の展

第３図　歴史民俗資料館における展示品解説の様子（葉杖）

示をよく見ておられる来館者や関係者から「この資料は初めて見た」といった声が多く寄せられるなどといった反響もあり、広島大学考古学研究室の調査研究の歴史の重みと底力を感じ取られた方も少なくはなかったのではないかと考えている。

以上のことから、本展の開催にあたり意図した、広島大学考古学研究室の調査研究の成果と考古学研究室の歩みの紹介をとおして広島県の考古学の歴史を広く知っていただくという所期の目的は遂げられたのではないかと考えている。

５．おわりに

最後に、同窓会では春成秀爾氏をはじめ、遠路はるばるお越しいただいた皆様方に御礼申し上げたい。また、論文集･文集の作成にあたっては多くの方々にご協力いただきながらも、その刊行が遅れたこと、あらためてお詫び申し上げたい。今後、広島大学考古学研究室がさらなる発展を遂げていくためには、これまで同様にお教えいただいた先生方、研究室修了・卒業生等、一緒に学んだ皆様方のご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。なお、１～３・５節は野島が、４節は葉杖が執筆し、野島が文体を調整して成稿した。

註

(1) 当初予定していた広島市中区上八丁堀のギャラリーでの展示について、石丸恵利子氏と松波静香氏にご協力いただいたものの、途中で断念せざるをえない状況となった。ご寛恕いただきたい

(2) 本報告執筆の野島と葉杖のほか、小林奈緒美氏や沖憲明氏らと相談して判断した。

(3) 古瀬清秀氏の50周年記念講演の内容骨子については、次の文献に掲載されている。
古瀬清秀　2016 「広島大学考古学研究室の50年をふりかえって」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学考古学研究室、1～8頁。

(4) 春成秀爾氏の祝辞の内容については、次の文献に掲載されている。
春成秀爾　2016 「広島大学考古学研究室草創期の人たち」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室50周年記念論文集・文集』広島大学大学院文学研究科考古学研究室、569～571頁。

(5) 土器片及び玉類は一括して１点として集計した。

引用・参考文献

河瀬正利　1992 「広島県埋蔵文化財保護行政四十年」『芸備』第21号、27～40頁（のち、『私と広島の文化財保護今昔』(2004) に再録)。